魚類防疫に関する技術指導と研究

（魚病対策指導事業・水産用医薬品対策事業）

勢村　均・堀　玲子・岡本　満・福井克也
山根恭道・若林英人・松本洋典・石原成嗣

1.研究目的

海面および内水面の魚病被害軽減と魚病の蔓延防止のため、魚病検査や水産用医薬品の適正使用の指導および養魚指導･相談を行う。

2.研究方法

種苗生産現場、中間育成場、養殖場を巡回し、疾病の対処法や飼育方法の指導、助言を行うとともに、疾病発生時には迅速に現地調査や魚病検査を行った。また、天然水域で大量斃死が起こった場合も現地検査や魚病検査を行った。

魚病の検査方法は主に外観および解剖による肉眼観察、検鏡観察と細菌分離を行った。細菌が分離された場合は､薬剤感受性検査（ディスク法）を実施し、治療・対策方法並びに水産用医薬品の適正使用について指導を行った。また、KHV 病や VNN 症等については PCR 検査を実施して原因ウイルスの存在を確認した。

なお、アユの冷水病に関しては「アユの冷水病対策事業」に別途記述した。

3.研究結果

今年度の魚病診断件数は、出雲地区海面 5 件、石見地区海面 6 件、隠岐地区海面 1 件、内水面 9 件（うち KHV 検査 2 件）であった。

出雲地区では、6 月下旬より中間育成中のメガイアワビ稚貝のうち成長不良の稚貝の斃死が観察され、7 月下旬には水温が急上昇したためと考えられる斃死が起こった。また、中間育成中のマダイ稚魚に 8 月上旬、オクロコニス症が発生した。本症は本県で初めて確認された。

アカアマダイは、天然親魚の VNN 保有状況を４、６、８月に 10 尾ずつ検査したところ、４月の検査個体のうち 1 尾が VNN 陽性の反応を示した。また、平成 22 年 2 月に中間育成中のアカアマダイ稚魚が斃死したが、原因は水槽換えの際の取り扱いの不手際と考えられた。

石見地区では、養殖ヒラメに 6 月から 7 月にかけて連鎖球菌症やハダムシ症が発生した。また、中間育成中のマダイ稚魚が 7 月下旬に斃死し、豪雨後の泥水の流入による生理的な障害が原因と考えられた。さらに、漁獲されたマアジから筋肉内寄生虫のテンタクラリア、マダイから寄生虫ディディモゾーンが確認された。

隠岐地区では蓄養中のマサバが斃死し、網替え時の取り扱いが原因と考えられた。

内水面では、天然水域での KHV 病の発生が 1 件、ウイルス保有魚の確認が 1 件あった。また、その他の魚病については、飼育中のドジョウ、ヤマメ、モロコ、キンギョで不適当な飼育法によると考えられる斃死やカラムナリス症による斃死が確認された。さらに、天然水域でフナやスズキの斃死が確認されたが、いずれも原因は不明であった。